氏　　名	鈴木　准（スズキ　ジュン）
学位の種類	博　士　（音　楽）
学位記番号	博　音　第 166 号
学位授与年月日	平成22年３月25日
学位論文等題目	〈作品〉ベンジャミン・ブリテン作曲　カンティクル第１番“愛する人は私のもの”op.40　他 〈論文〉ベンジャミン・ブリテンBenjamin Britten《カンティクル（聖歌）Canticle》全５作品に於ける詩の扱いと演奏解釈

論文等審査委員

（総合主査）	東京芸術大学	教　授	（音楽学部）	多田羅　迪　夫
（演奏審査主査）	〃	〃	（　〃　）	多田羅　迪　夫
（演奏審査副査）	〃	〃	（　〃　）	寺　谷　千枝子
（　〃　）	〃	〃	（　〃　）	成　田　英　明
（　〃　）	〃	准教授	（　〃　）	川　上　　茂
（論文審査主査）	〃	教　授	（　〃　）	多田羅　迪　夫
（論文審査副査）	〃	教　授	（　〃　）	寺　谷　千枝子
（　〃　）	〃	教　授	（　〃　）	成　田　英　明
（　〃　）	〃	准教授	（　〃　）	川　上　　茂

（論文内容の要旨）

研究の目的

20世紀イギリスを代表する作曲家ベンジャミン・ブリテンEdward Benjamin Britten（1913～1976）は、オペラやオーケストラを伴う大規模な声楽作品などで知られる。だが、歌曲作品などの比較的小規模なものにも、同様に彼の才能が結実したものがあることは、あまり知られていない。

本論文では、ブリテンの《カンティクル（聖歌）Canticle》と題された、第１番から第５番まである５つの歌曲作品について取り上げた。これらのすべてが小規模な編成による演奏形態で、比較的短い時間で演奏され完結する作品であることから、大規模な作品よりも端的に作曲家の精神性が反映され、表出していると考えられたからである。さらに、作曲家の生涯の広範囲に渡って制作された作品群であるということから、作曲家にとって重要なテーマを扱っている可能性が高い。このような注目すべき作品群であるにも拘らず、過去の研究においては、それぞれの作品について個々の評価は為されているものの、全てについての統一的な評価が為されたことがなかった。この理由としては、同一のタイトルが付されているにも拘らず、テクストの内容に直接の関連性はないことなどが考えられる。これまで、概してこの作品群は「宗教的（キリスト教的）なテーマを扱ったもの」であると語られるに留まっている。しかし、この作品群で扱われているテクストや表現方法には、宗教的な要素のみならず、作曲家の重要な精神性が表されていると考えられる。

本論文は、過去に為されていない《カンティクル》全５作品に対する統一的な解釈を試み、その演奏の助けとなる、作品群に込められた作曲家の精神性を導き出すことを目的とする。

第　１　章

《カンティクル》全５作品それぞれの成立について、作品ごとに節を設けて解説した。

第 2 章

第１章同様、それぞれの作品ごとに節を設け、テクストの全対訳を示した。さらに、主に声楽的な観点から、演奏に必要な楽曲の分析を行った。

第 3 章

前章までの解説、分析をもとに、《カンティクル》全５作品において表現されている作曲家の精神性について、総括的に取り上げた。とりわけ、《カンティクル第２番》において初めて明確に用いられたホモフォニーによる表現が、この作品群の統一的な解釈に重要な要素であることが、この章での考察によって明らかとなった。

結　　論

本論文によって、これら《カンティクル》と題された作品には、宗教的なテーマにインスピレーションを得て表現されたブリテンの精神性に共通点があることが示された。この精神性とは、演奏という作品との取り組みそのものにおける演奏者同士の深い共鳴であり、共感に基づく演奏行為による作品の表出こそが、その根幹を成すものであった。これらの作品に表現されたものの中から、とりわけ重要な表現方法であり、際立った特徴を持つホモフォニーやホモフォニックな技法に求められる演奏者同士の深い共鳴は、ブリテンの《カンティクル》５作品における演奏解釈の核心を占める要素であることも明らかになった。

各々の作品で用いられたテクストは、さまざまな題材から採られた。しかし、それらの作品の中では共通して、登場した人物の人格の融合が多面的に表現された。特にホモフォニーという表現においては、１つの存在を複数の演奏者（ソロイスト）によって演奏することを要求した。そこには、演奏者間における深い共鳴が必要不可欠であり、作曲者としての関わりだけでなく、演奏者として関わったブリテンだからこそ、この深い共鳴を求めたのであろう。これこそが彼の精神性の現れであり、これによって安定した自己を確立しようとしたのではないか。それぞれのテクストの選択に反映されたのは、意識的、無意識的のいずれにせよ、ブリテンが向き合っていた精神的な課題であるかもしれない。この課題を、演奏者によるアンサンブルという行為によって昇華することを試み、新たな自己を実現しようとしたと思われる。さらに、《カンティクル》が、彼の生涯において晩年と呼べる時期に再び取り上げられたことは、長きにわたってその課題と向き合っていたことを意味しており、この課題が生涯に渡って、ブリテンの創作の欲求としてあり続けたことの証しである。彼は、それぞれの作品に用いられたテクストの中に、自分自身の姿を投影した。

このように、本論文では、過去の研究において為されていなかった《カンティクル》全５作品の統一的な解釈を導くことができた。この解釈は、これらの作品の演奏表現にとって極めて重要であるだけでなく、ブリテンの他の声楽作品の理解への助けともなると確信している。

（博士論文審査結果の要旨）

鈴木准氏の「Benjamin Britten　ベンジャミン・ブリテン《カンティクル（聖歌）Canticle》全５作品に於ける詩の扱いと演奏解釈」の題目による論文について審査を行った。

各審査員共に「演奏家が自らの演奏を通して楽譜とテキストに向かい、その感性と知性とを動員してに裏打ちされた論考となっていること」に高い評価を下している。

特にカンティクル第１番から第３番までから第４番に取りかかる17年の隔たりがあり、長い年月に渡り作曲された作品を一つの歌曲集としての統一的解釈を与えうるかという難問に説得力のある答えを引き出すことに成功したことは評価出来る。

特に第２番において「ホモフォニー」の手法という概念により、演奏者間の〈深い共鳴〉による表現こそがBrittenの精神性であるという結論を得ることによって５曲全体を統一的に捉える事が出来た。そしてそのことによって演奏に対する解釈が一つの大きな方向性を見いだすという、演奏家にとって一番望ましい演奏と論文の関係がここにある。

４名の審査員全員一致で合格の判定とした。

（演奏審査結果の要旨）

鈴木准氏の課程博士学位演奏審査会（2009年７月７日第６ホール　18：30開演）で、Benjamin Britten ベンジャミン・ブリテン作曲の《The Canticles Ⅰ～Ⅴ》（氏の表記法に従えば《The Five Canticles》の演奏）の全曲が演奏された。

『カンティクル第１番“My beloved is mine愛する人は私のもの”op.40』(Tenor+Piano)

『カンティクル第２番“Abraham and Isaacアブラハムとイサク”op.51』(Tenor+Countertenor+Piano)

『カンティクル第３番“Still falls the rainそれでも雨は降る”op.55』(Tenor+Horn+Piano)

『カンティクル第４番“Journey of the Magi東方の三博士の旅”op.86』
(Tenor+Countertenor+Baritone+Piano)

『カンティクル第５番“The death of Saint Narcissus聖ナルシサスの死”op.89』(Tenor+Harp)

以上のように各曲毎に異なる楽器編成のアンサンブルで、この５曲を全曲で取り上げる事はかなりの困難を伴うことである。音楽的にも声楽技術的にも非常に難易度が高いだけでなく、テクストを解釈する高い語学力と洞察力が必要である。

鈴木准氏は上記の総てにおいて非常に高い水準でそれを達成したことは各審査員とも共通の認識として所見を述べておられる。特筆すべきは、氏の声楽技術と音楽性の高さであるが、第２番における唯一無二の神の存在を二人の歌手で同時に演奏するとき、或いは４番における三博士の三人の人格がやがて一人の人格に融合するとき、「深い共鳴」によって「ホモフォニー」として表現する場合の氏のアンサンブル能力の素晴らしさも際立っている。共演者の演奏もまた鈴木准氏の意図を具体化する賞賛されるべきものであった。

心地よい音楽的充足を覚える博士学位審査での演奏に対して、４名の審査員が全員一致で合格の判定とした。